

特別記念賞

【国語】

近代文学作品の魅力を主体的に 追究する学習者の学びの姿

上越教育大学附属中学校

いわ ふね なお き
岩船 尚貴



概要

パンデミックを経験した令和の時代だからこそ、生徒は過去の遺産である文学作品を読み、受難の時代を生きるヒントを享受できるのではないかと考え、小川未明(1882-1961, 小説家・児童文学作家)の作品を教材として実践研究を構想した。中学校3年生に対して実践と調査を行い、抽出生徒の振り返りの記述とアンケートから研究課題の検証を試みた。

論文内容の紹介

1 | はじめに

本研究の目的は、生徒が近代文学作品を主体的に読み、作品の魅力を追究するための単元構想及び手立てを提案することである。「学校読書調査」が示すように、中学生になると読書率は低下する傾向にあり、特に大正・昭和初期に書かれた近代文学に自ら親しむ生徒はごく僅かである。その理由は、文体が難しいことや、結末が必ずしもハッピーエンドではなく、人間のエゴイズムや悲哀など、現代の中学生にとっては暗いテーマの作品が多いことも一因と考えられる。本研究では、生徒がこうした課題を克服して、近代文学作品を主体的に読み、その魅力を発見するとともに、読み深めたことを社会生活に生かそうとする姿を目指した。

2 | 研究の目的に迫るための手立て

本研究においては、以下の手立てを講じて実践を行った。

- (1)パフォーマンス課題の設定とルーブリックの提示
- (2)自己調整振り返りシート
- (3)ICTの活用
- (4)ビブリオバトル形式で作品の魅力を紹介

3 | 研究方法

(1)研究課題

単元構想や手立ては、主体的に近代文学を読み、作品の魅力を追究する生徒の姿につながったか。また、生徒は小川未明作品を読む意義や価値を見いだしていたか。

(2)教材

「赤い蠟燭と人魚」「眠い町」「野薔薇」など、小川未明の童話作品30編を読書教材として選定した。作品はPDFでクラウドに保存することで、生徒が休み時間や家庭でも読書に親しめるようにした。

(3)検証方法

研究課題を検証する方法は2つある。

1つ目は、抽出生徒に焦点をあて、振り返りシートの記述から、生徒の学びの深まりの過程を質

的に分析し、考察した。

ケートを実施し、質的に分析と考察を行った。

2つ目は、単元終了後に対象生徒全員にアン

4 | 実践の概要

時	主な学習活動(◇)
1次	
1	◇単元の目標を確認し、小川未明作品を読む。
2	◇小川未明文学館で小川未明や作品、その世界観について知る。
3	◇小川未明研究者の講話を聞く。
2次	小川未明を読んだことのない1、2年生に作品の魅力を紹介しよう
4	◇パフォーマンス課題、ルーブリックを確認し、30作品の中から、1、2年生に紹介したい作品を選択する。
5、6	◇選択した作品について、内容や魅力を伝えるスライドを共同編集で制作する。
7	◇発表のリハーサルを行う。
8	◇2年生を対象にビブリオバトルを行う。
9	◇1年生を対象にビブリオバトルを行う。
10	◇代表グループの発表を受けて、小川未明作品の魅力とは何かについて再考する。
11	◇おすすめの小川未明作品についての紹介動画を作成する。 ◇単元を振り返り、学んだことや感じたことをポートフォリオに残す。

※四角囲みはパフォーマンス課題

5 | おわりに

活用した国語科教育、読書教育の可能性を模索していきたい。

研究課題を検証するために、抽出生徒の振り返りシートの記述や、アンケート結果について分析と考察を行った結果、生徒は主体的に近代文学を読み、作品の魅力を追及するとともに、未明作品を読む意義や価値を見いだしていた。また、本実践研究において、3年生が1、2年生に小川未明作品の魅力を伝えるビブリオバトル形式のブックトークを行ったことにより、学校全体で未明作品に親しむ機会を得ることができた。図書委員会は「小川未明読書月間」を企画し、図書室に小川未明コーナーが設けられるなど、生徒会活動とも連携した企画も行われた。ICTを活用したことで、読書は個人のものに留まらず、学校全体を巻き込み、結果として学校の読書率を上げることにつながったと言える。今後もICTを

特別記念賞

【家庭】

個のウェルビーイングと多様性を高める中学校家庭科の授業実践

岡山大学教育学部附属中学校

かわ かみ さち こ
川上 祥子



実践の概要

本実践は、2022年にコロナ禍で入学した生徒を対象とし、1年生で実施した家族・家庭生活の授業が、その後の授業や学校生活にどのようなつながっていくのか、進級後も検証を続け、その成果から個のウェルビーイングの向上を測った。

まず、それまでの家族・家庭生活のカリキュラムに、「LGBTの家族を題材にした授業」を加えることで、SDGs5（ジェンダー平等）におけるアンコンシャスバイアスの解決と多様な家族を理解する重要性をより意識できるようになるのではないかという仮説を立てた。その中で、SDGs10・17につながるような、互いの生き方を認め合い受け入れ合う多様性を尊重する風土が育まれること

を目指した。

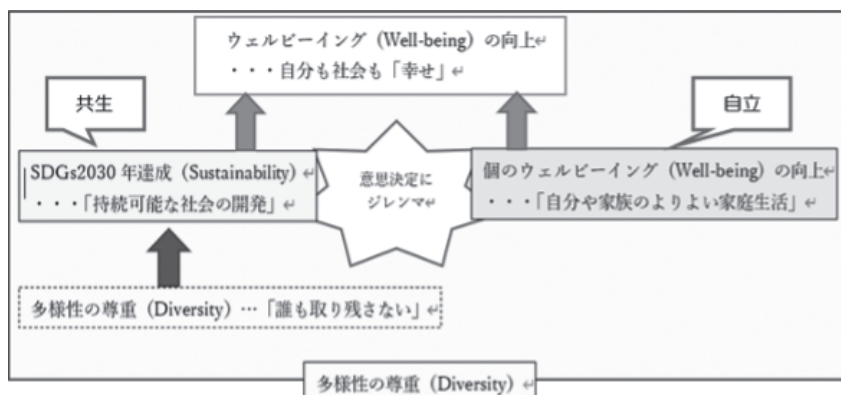
そして、これまで授業実践で強く意識してきたサステナビリティ（持続可能な社会の構築の視点での意思決定）と個のウェルビーイングでの意思決定とのジレンマにも注目した。

論文内容の紹介

1 | 研究の目的

持続可能な社会の構築を目指す生徒が、現在や将来の実生活において、家庭科の学びを活かした「多様性を尊重する意思決定」がよりできるようになることを目指した。そうなることが、ウェルビーイングの向上につながると考えた。

これまでの研究で目指してきた「持続可能な社会の構築の視点での意思決定」に加えて、「個



のウェルビーイングの向上」が、ともに達成できることが真のウェルビーイングの実現であると考え、構想を図にまとめた。なお、ジレンマを考え

させる場面として、「てまえどり」「フェアトレード」「ファストファッション」などを設定した。

2 | 実践

	授業の内容	生徒の思考の流れ(○学び・●新たな課題)
1年	1 家族・家庭とは モデル家族の生活時間から家庭の仕事を知る。 夫婦の家事育児時間の統計グラフで現状を知る。	○日本では、家庭での男女の格差がある。 ●家庭で、男女問わず中学生の自分ができる仕事があるのではないか。
	2 家族を支える社会 家庭の仕事を手を助ける人・もの・こと(制度)に気づきモデル家族へのアイデアを出す。国際比較も考慮。	○家族で協力し、何かを利用したり工夫したりすれば、家庭生活がよりよくなる。 ●日本社会は男女平等が不十分なのではないか。
	3 ジェンダーギャップ指数 新聞記事(山陽新聞さん太タイムズR4.8月22日)を読み、自分や周囲のジェンダー意識を振り返り、各自がコメントを書き共有する。	○記事にある「ジェンダー平等に配慮していないおもちゃ」のように周囲には多くの男児向け女児向け(アンコンシャスバイアス)がある。 ●もっと実生活で意識するべきではないか。
	【宿題】ジェンダー不平等発見レポート 地域社会での発見(意見や写真やイラスト)をA4用紙一枚以内まとめる。	○意識的に実生活を見つめると、多くの男女不平等があった。 ●自分も無意識のうちに偏見をもっているのではないか。
	4 パフォーマンス課題発表 発見を共有し、アンコンシャスバイアスに気づく。	
5 多様な家族 LGBTの家族を知り、多様性を尊重する大切さに気づく。SDGs10を確認する。	○持続可能な社会には、家族の協力・協働とともに、身近にある多様性の尊重が必須。 ●男女・性的指向以外にも不平等が多く存在するのではないか。	
2年: 不要な布でリメイク ふれあい体験にむけ園児にティッシュケースを作る。	○プレゼント等は男子用女子用以外の分け方ができる。 ●大人(環境)が幼児の考え方に影響するのではないか。	
3年: 日本の家族・家庭生活 文化の伝承・創造の視点で衣食住を捉えた後、家族・家庭生活においてもその視点で特徴や課題に気づく。	○偏見を無くすることが持続可能な社会につながる。 ○多様性を尊重することはウェルビーイングにつながる。 ○個人の利益と社会の利益を伏せて考えることは必須だ。	

3 | 成果と課題

1年生「多様な家族」の授業の振り返りには、「アンコンシャスバイアスの存在に気づいた」「多様な考え方を受け入れることができた」との内容の記述が多くみられた。

2年生に進級後、幼稚園児に贈るティッシュケース制作の授業では、「男子用、女子用と分けて作品を集めるのではなく、可愛い系とカッコいい系に分ける」という案が生徒からでた。SDGs



5やSDGs10への意識、多様性の尊重が高まった。

同性婚への意見	1年次	3年次
賛成	43.8%	41.3%
どちらかという賛成	40.6%	45.3%
どちらかという反対	13.1%	8.7%
反対	2.5%	4.7%

3年生での、文化の伝承・創造の視点で考えた日本の「家族・家庭生活」の授業では、最後に同性婚への賛否を問うたところ、「誰も不都合ではないから、その人の自由である」という端的な意見は少なく、多様性を尊重しつつも、社会のことも意識し、そのジレンマの解決のために考えようとしているのが特徴であった。これまでの学習において、個人の利益と社会の利益におけるジレンマの存在を認め、よりよい意思決定をする力がついているためと考えられる。また、他国と比較したり、社会科で学んだ法律や権利を根拠に挙げたりして、記述している生徒が多くみられた。

以上のことから、今回の実践は、多様性を尊重する生徒の育成に効果的であり、個のウェルビーイングの向上に有効であった。

課題として、授業の振り返りや授業後の一時期のみならず、長期にわたる実生活での学びの活用が引き続き求められる。家庭科の目標である「自分や家族のよりよい生活」を意識することを副次的にせず、「個のウェルビーイングの向上」と「持続可能な社会の構築」という双方の充実を目指すことで、ウェルビーイングの向上を図りたい。

奨励賞

【外国語科】

子ども・教職員・地域をつなぐ 外国語科プロジェクト型学習

大阪府立久米田高等学校（前 岬町立岬中学校）

じゅうの かなみ
重野 金美

実践の概要

本実践は大阪府最南端に位置し、過疎地域にも指定されている岬町に唯一の中学校である岬中学校の中学1年生が、地域の人々と関わりながら、岬町の抱える実際の課題を、英語を使って解決するプロジェクト型学習 (Project-Based Learning) の実践である。プロジェクト終了後に、生徒に対して質問紙調査（4件法調査／生徒の振り返り・感想の記述）を実施し、本校の生徒が抱える3つの課題に対しての効果を検証した。

論文内容の紹介

1 | 実践の目的

本校生徒が抱える課題を解決することを念頭に、本実践の目的を以下の3つに定めた。

- ① 生徒が明確な目的意識をもって英語を学び、英語学習の意義や必要性を感じ取ることができる
- ② 生徒の地域に対する理解を深め、地域とのつながりを強める
- ③ 生徒の自己効力感を高める

2 | 実践の全体計画

本実践では、岬町の抱える「外国人観光客が訪れない」という課題の解決をめざして、生徒が地域の人々に直接出会い、行ったインタビュー結